

2013 年度自己点検・評価報告書の作成を終えて

教育支援本部担当常務理事

自己点検委員会委員長 浜村 彰

2012 年 4 月に大学基準協会に対し認証評価のための自己点検・評価報告書が提出され、書面審査を経て同年秋に実地調査がなされた結果、2013 年春に無事適合との認証評価を得ることができた。とりわけ、教育開発支援機構による教員の授業改善と学生による主体的な学習の支援、国際文化学部における「スタディ・アブロードプログラム」の組織的な指導、大学全体での PDCA サイクルの確立などが評価されており、学部等の各運用単位の真摯な取り組みの賜物として、深く感謝申し上げたい。

そうしたこともあって、5 年目となる今年度の自己点検・評価活動については、評価項目を若干絞り込み、①認証評価結果への対応、②2012 年度自己点検・評価活動への対応、③第 I 期中期目標（2010～2013 年度）の総括の 3 つを自己点検委員会の基本方針として、各運用単位で自己点検・評価活動に取り組んでもらうこととした。

①については、大学基準協会の認証評価で指摘された 11 の努力課題について、各運用単位でその解決に向けた取り組みが着手されている。とくに大学院の定員未充足・超過の問題や大学院博士後期課程のコースワーク、リサーチワークの明確化等は、大学院改革の一環として早急に取り組むべき大きな課題である。

②の 2012 年度自己点検・評価活動への対応については、八名大学評価室長が総評で指摘する諸点が今後の課題として浮かび上がっているが、とくに学部カリキュラムの体系化については、秋入学とセメスター制の導入に関連して、すでに学部長会議懇談会においてコースナンバリング制の調査と研究に着手しており、各学部・研究科における検討が今後進むものと思われる。

③の第 I 期中期目標（2010～2013 年度）の総括については、自己点検懇談会において各学部の進捗状況の報告がなされ、学部間の質疑応答を通じて各学部が取り組むべき今後の課題が明らかとなっている。

大学基準協会による次回の認証評価は 2019 年となるが、それまでに毎年の自己点検・評価活動を通じて学部・研究科等の教育の質保証が着実に進展することを強く願うとともに、学部等運用単位の労を惜しまない自己点検活動と評価委員による誠実な評価に対してあらためて敬意を表したい。繰り返すまでもないが、内部質保証の鍵を握るのは、点検・評価（Check）した後に、目標の見直しや浮かび上がった問題点を解決するという取り組み（Action）の実効性である。その意味で、手間がかかる作業であるが、質保証委員会の活動の実質化こそが、各学部等運用単位の教学改革を進展させる鍵なのである。